

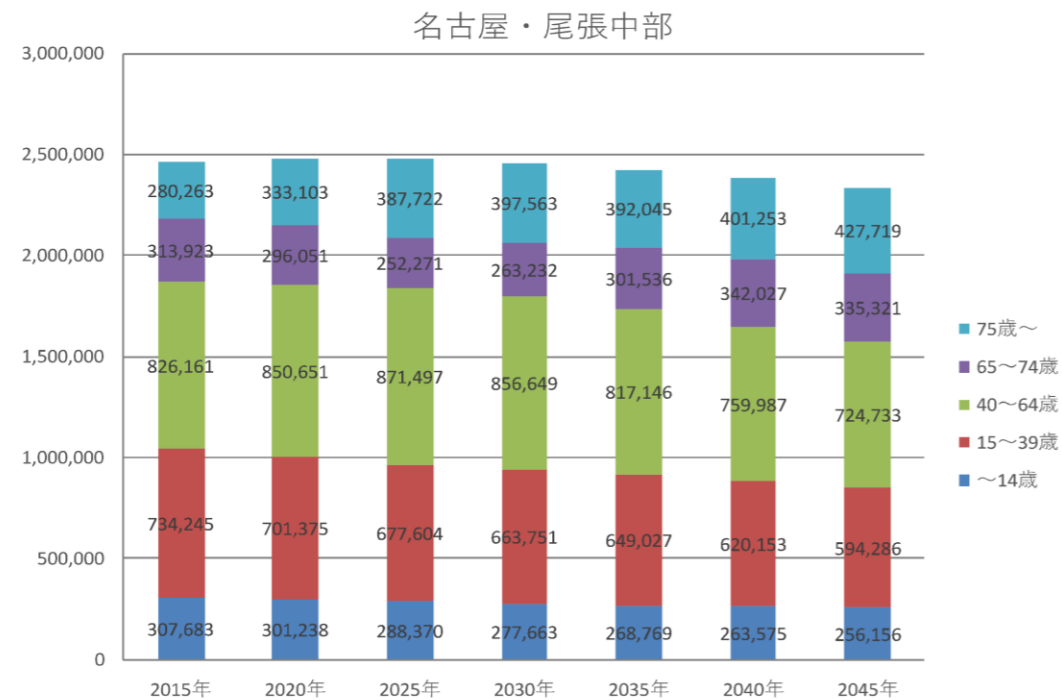
公立・公的病院の役割の再検証について（中日病院 説明資料）

1 取り巻く環境を踏まえた自院の役割の整理

（1）現在の地域の急性期機能

4 機能	2018 年度 病床機能報告	2025 年の 病床数必要量
高度急性期	6,009	2,885
急性期	7,926	8,067
回復期	2,928	7,509
慢性期	4,448	3,578
合計	21,311	22,039

（2）地域の人口推移



（3）自院の役割

名古屋医療圏においては現在、高度急性期、急性期から回復期や在宅、施設の対象にならない患者の受け入れ先が限られており、当院は患者が切れ目のない医療を受けられる「つなぎ役」の役目を果たしていると考えている。

2 自院の今後の方針等

（1）分析対象領域ごとの医療機能の方向性

当院の一般病棟では現在、前方病院からのポストアキュートと、在宅や介護施設からのサブアキュートの患者で7割を占めるが、紹介患者の中には高度で濃厚な治療が必要な患者がいる。ただし、患者の主力が回復期であることは事実である。実態に鑑み、当院は一般病棟の病床機能を急性期から回復期に変更する。と言っても地域包括ケア病床への転換は施設基準の問題等で無理があるため、当面は現行の医療を大きく変えることはなく、在宅復帰率の向上や在宅支援などに努めていきたい。一方、急性期患者の受け入れ先であり続けることは、当院に対する地域の要請であるため、今後もポストアキュートで急性期患者を一定数受け入れるのをはじめ、市内外に認知されている手外科の専門として、手術からリハビリテーションまでを完結できるセンターとして救急患者にも積極的に対応していきたいと考える。急性期医療を残すことで「看取り」の患者に対しても濃厚な治療が必要な間は急性期対応とし、その後は患者や家族の希望により医療療養病棟で「看取りのケア」の実施も可能になる。2025年に向け、患者、家族に寄り添った医療と看護を提供できる優しい病院として引き続き地域に貢献していきたい。

（2）4機能別の病床の変動

4 機能	2017 年度 病床機能報告 (厚労省の分析時点)	2025 年の 病床数の予定
高度急性期	0	0
急性期	42	0
回復期	0	42
慢性期	51	51
合計	93	93